

【好評連載】

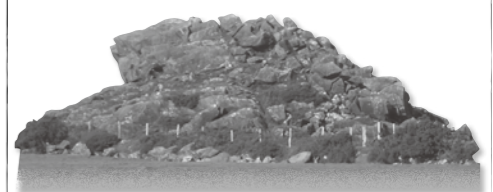


私、イギリスと関わってます

vol.12

英国史上初の日本人議員の ウエールズとともに歩んだ43年間

栃木の作り酒屋に生まれた男は、大学卒業後イギリス、ウエールズへ渡り、70歳で英国初の日本人議員となった。日本人と似ているというウエールズの人と町を愛す男の、波瀾万丈の人生とは。 文/笹塚シタロー



世界遺産にもなっているイングランド南部のストーンヘンジは、ウエールズから切り出した石を使って造られたといわれている。ということは、ウエールズにもストーンヘンジを造った古代人が足を踏み入れていたのだ。島崎さんの住むカーディガンの周辺にも上のような同質の石を算出する岩山がある。

しまざき あきら
島崎 晃 さん

1941年、栃木県生まれ。学習院大学卒業後、1967年に渡英、その後ウエールズ大学アベリストウィス校国際政治学科に留学。人口4,500人のカーディガンにてカフェ経営を経て、日本語講師として活動。2001年に永住権を取得。2012年5月、カーディガンの町会議員選に出馬、2位当選を果たす。



マスやサケ釣りで有名な溪流。カーディガンの町には、こうした豊かな自然も近辺にたくさん溢れている。
島崎さんの自宅近くの行きつけパブ。16世紀築で今も現役。ウエールズには、こうした歴史あるパブが多い。

日本人のいない町へ

「私が偉いんじゃない。外国人の私を選んだウエールズ人が偉いんですよ」
英国史上初の日本人議員となった島崎さんは、快拳をそんなふうには絡めた。2012年5月、ウエールズ西部の海沿いの町カーディガンの町議会選に、ウエールズ民族党より初出馬、見事当選を果たしたのである。

「反骨の人である。」
栃木県の作り酒屋に生まれ、学習院大学に進学。そこでイギリス哲学を専攻したことがこの国との関わりのはじまりだ。なぜイギリス哲学を問うと、「なんでだろうね。当時は哲学というみんなドイツ哲学をやったものだけど、僕はなぜイギリスだったんだよね」
卒業後の一時期は実家の作り酒屋を手伝ったが、郷里出身の国会議員から

日本人とウエールズ人は似ている

ウエールズのどこに惹かれたのか。「まずは日本人に近いところでしょうね。内向的で謙虚。大げさなものを話さないというふうな。そして政治。ウエールズはイングランドの植民地のような立ち位置ですから。スコットランドのように独自の憲法がある訳じゃないし。だからどうしてもイングランドの人に対して劣等感というか遠慮というか、あったんです。ところがそこに民族主義が勃興してきた。それに興味を持ったんです」
「Jack Bara Gwys」はいつしか、英国からの独立を目指す民族主義政党「民族党」の党員や支持者たちの溜まり場となっていく。



1丘から見たカーディガンの町。緑と家が織りなす美しい景色。2ウエールズは羊毛でも有名。のどかな牧羊風景がこちらで見られる。3カーディガンの公会堂。ここで町議会が開かれる。議員としての島崎さんの活動の場。

「当時はそれでも、一般的には民族主義なんて主流ではなかった。あの頃そういう話をするときみんないやがってね。イングランド人を怖がってたんですね。看板も皆英語表記でしたしね。ほら、日本人って勧善懲悪が好きでしょう。弱きを助け強きをくじく。僕にもそういう感覚がありましたから、弱い民族を僕は助けたいと思った。そういう意味では「カフェは」民族主義の浸透に少しは力になれたのかな」
その後も波瀾万丈の人生は続く。カフェは3年で閉め、その後ケータリングビジネスに従事、ナイジェリアやアルジェリアに7年間。なんとサハラ砂漠の

ど真ん中で働きながら店の再開資金を貯めた。だが勇躍カーディガンに戻ってきた彼を待っていたのは入国管理局からの帰国命令。商業ビザが下りないというのだ。
「泣きながら。悔しかったね」
だがこのときカーディガンの人々は猛然と署名活動を開始。「彼はこの街に必要な人材だ」と2週間で1200名もの署名を集めたという。カフェを開いた3年間で彼の存在はカーディガンの人々に浸透していた。その後、入国管理局のほうからいも、日本語講師をするということが入国を許可され、再びウエールズへ。大学で教えがては英国特許庁長官をはじめ職員にも教鞭を執るまでに。
2001年に英国籍を取得。やがて定年退職した島崎さんを待っていたのは、地元からの「町長になつてくれ」コールだった。町長になるには町会議員を経験していることが必要。そこで民族党からの出馬となったという訳だ。
「町長になりたいなんて思っていないけど、これまで本当にカーディガンの町の皆さんのお世話になったから、議員として自分の力でやるだけお手伝いをしたいと思っていますよ。とにかく今はウエールズの文化を日本に発信したいと考えています」
日本には帰らないのですかと尋ねると、「いやあ、帰ろうと思っても帰れないけど、日本には知り合いも、もうほとんどいないですからね」と笑った。